

スポーツは人と人を繋ぐツール

(原文)

福澤 ころこ (17歳)

埼玉県

筑波大学附属坂戸高等学校

「スポーツ」と聞いて、あなたは何を思い浮かべるだろうか。オリンピックや、自分のやっているスポーツなど、様々なことを思い浮かべているだろう。私は今まで、スポーツとは勝ち負けが一番大切だと考えていた。しかし、様々な経験を通して、「スポーツとは人種、性別、年齢関係無く繋がれるツールである」と考えるようになった。

私は幼稚園の頃からチアダンスを習っていて、順位や得点にこだわってきた。しかし、高校で「スポーツを科学する」という授業を履修し、価値観が変わった。この授業では、障害を持った同年代の人達に向けてスポーツを考え、実践することがカリキュラムに組み込まれている。身体障害、知的障害を持っている特別支援学校の人達と交流会を2回行い、一緒にスポーツをする。そのために約半年間、グループで新しいスポーツ(アダプテッドスポーツ)を考案し、準備を進めた。私の班は、「ジェスチャー＋スポーツ」という考え方で、他の班では、ボールを使ったり、絵をツールとして用いたりしてスポーツを考案していた。この準備段階では、「これらをスポーツと言っているのか」と疑問に思っていた。しかし本番が近づいて、特別支援学校から送られてきたプロフィールに「腕が動かすことができない」「ベッドから降りることは出来ない」という内容を目の当たりにしたとき、みんなができるスポーツとは何か、どうしたらみんなが出来るのかということを中心に考えるようになっていった。そしてついに本番である。私たちの考えたスポーツを楽しく、笑顔で、そして全力で取り組んでくれる様子を見た時、「スポーツは、勝ち負けでない。誰もが楽しめて、誰もが繋がれるものでありたい」と心の底から思った。

この授業の一環として、WOWOW で、パラリンピックアスリートのドキュメンタリー番組を作られている木下敬太さんのお話を聞く機会があった。木下さんは、様々なアスリートに取材し、「スポーツは人との心の繋がりを大切にできる力を育む」ものだと言っていた。木下さんの考え方は私が特別支援学校との交流会で得たものと共通点が多くあり、深く共感した。

私の価値観は障害を持つ人達だけを対象にしているわけではない。スポーツを通して家族、友人、海外の人達などと、もっと繋がる可能性があることを指している。スポーツは世界の共通言語と言われるように、言葉が通じなくても体を動かしながら、コミュニケーションを取ることができる。また、コミュニケーションを取っている内に、相手の文化やバックグラウンドが分かってくる。多くの人が互

いを理解し、楽しめるように工夫していけば、全ての人がスポーツをより身近に感じることができ、周りの人とのコミュニケーションを日常的にもっととれるようになるのではないだろうか。

高校3年生になり、体育委員長を任されることになった。そして、コロナウイルスの影響で高校に入学してから一回も開催が叶わなかった体育祭を2年振りに行えることとなった。体育祭のコンセプトとして「縦横の繋がりを大切に、勝ち負けを気にせず」という考えを提案した。この言葉を多くの生徒が受け入れ、今年の体育祭はスポーツを通して、学年を越えて関係を結び、誰もが楽しめるものになったと感じている。私自身も、準備をしている中で後輩や先生方、今まであまり話したことが無かった友達と繋がりを持つことができ、スポーツを通して新しい交友関係が生まれた。また、体育祭が終わった後に、話したことがない後輩の子からメッセージが届き、感謝の気持ちを伝えてくれた。スポーツは、人との繋がりを強く作りあげてくれることを強く実感した。

私は、チアダンスで全米1位を取ることが小さい頃からの夢だ。この目標を達成する上で、「スポーツとは人種、性別関係無く繋がれる」ということを日々頭の中に思い浮かべ、チームのメンバーや、これから関わる人との繋がりを大切にしていきたい。